

私は誰かの1番になりたい_____

石山あやか（いしやま あやか）

世の中に平等なんてない

誰かにとっての1番の席はたった一つしかないから

誰かに愛されるということが誰かの1番になるということなら……。

「すごいね。いつもいつも一番なんてすごいよ。」

私はみんなからお祝いの言葉を投げかけられる少女を見ながらそんな言葉を聞かされていた。手元にあるのは審査員賞の文字が刻まれた表彰用の盾。

また1番にはなれなかったんだ。ここにいる人たちの中の特別にはなれなかったんだ。どれだけ頑張っても私はその場の主役にはなれない。

ある程度は認められても、代わりの利くものにしかなれない。

そのことが私にとってはコンプレックスだった。

何かの賞を取ると、全校集会の時にみんなの前で校長先生が表彰状を読んでもらって、みんなが拍手してくれる。部活動、習い事、勉強や〇〇検定合格など、表彰状がもらえるものなら何でもほめてもらえる時間。

私はたびたび前に呼ばれて発表される生徒の1人だったと思う。本来は素敵なことなのかもしれないけど、私はなんだか恥ずかしくて嫌だった。

普段はあまり自己主張がつよくないこともあり、クラスでも目立たないほうの生徒のはず。それなのに生徒全員が集まる全校集会でみんなの前で注目されるのが恥ずかしかった。

「また石山じゃん。この前はピアノのコンクールで、今回は読書感想文。すごーえーよな。」

「俺も呼ばれないかな？ほら、字の汚さ1番とかならなれる自信あるぜ。」

「何言ってるんだよ。きれいでほめられることはあっても、汚いは直せって言われるよ。」

「それはそうか。」

同じクラスの男子が私の席から少し離れたところでそんな話をしながら私のほうをちらちらとみてきた。よくわからないボケを言って一緒に話している男子たちは爆笑した。

教室中に響き渡るような笑い声に、別の話をしていたクラスメイト達はその男子たちのほうへと視線を向ける。私はなんだか怖くなって、自分の席に座ったまま机を見つめて縮こまった。

正直あんまり目立ちたくないし、男子って意地悪な生き物だから、このことで何か意地悪言われるんじゃないかとおびえていた。

「でもさ、あいついつも2番じゃね？今回も審査員賞って言われてたし、前もそうじゃなかった？俺知ってるよ。ああいうのって器用貧乏っていうらしいよ。」

「え？貧乏？あいつんち貧乏なの？ならすごいんじゃないかってむしろかわいそうじゃん。」

「ちげーよ。器用貧乏。何でもできるけど得意なことはないみたいなこと言うんだって。」

いつも自分だけで気にしていたことが遠慮なく言葉にされていき、恥ずかしさとかみじめさでどうにかなってしまいそうだった。私は膝の上のところに置いた手でスカートのすそをつかみ、ぎゅっと力を込めて耐えようとした。

そうしないと、なんだか心が痛くて涙をこぼしてしまいそうだった。

「ちょっと、男子。ひどくない？全部聞こえてるんだけど。少なくともあんたよりもあやかはできることたくさんあるんだから。」

「そうだよ。あんたは表彰なんてされたことないじゃん。」

同じく話が聞こえていたクラスの女子が男子に食ってかかった。

「うっせーな。お前のがへっぽこじゃねーか。ドッチボールも弱いくせに。俺の得意なことは表彰されないだけだし。」

「なんですって？」

そこから男子と女子で分かれて言い争いになった。最終的には男子が女子を泣かせたところで先生が来て、その男子は謝罪させられていた。

話の中心人物に勝手にされて、別のところでけんかになり大事になって、関係のない人たちで解決してしまう。わたしも傷ついてははずなのに、私が発端になった話の中ですら話題の中心は別のところへと行ってしまい、私の気持ちはなかったことになってしまった。

本当なら自分で嫌だと思うことを伝えられたらいいのかもしれない。でも、相手も間違ったことを言っていない気がして何も言えなかった。

いや、間違ったことを言っても何も言えなかっただろう。

そのこと以来、みんなの前で何かを表彰されるのが怖くなった。みんなに背中を向けて校長先生からほめてもらう間、みんなからどんな目で見られているのかを考えると怖くて仕方なかった。

中学生になってもあんまり変わらなかった。思っていることがあっても伝えられないし、何かで1番になれることもなかった。

自分の存在価値があんまりよくわからなくなってしまい、スクールカウンセラーの先生のところに一度だけ行ってみたことがある。

何に対しての不満を抱えているのかあんまりうまく話すことができなくて、しどろもどろになる私にスクールカウンセラーの先生が1つアドバイスをくれた。

「何か嫌だと思うこととか、苦しいと思うことをノートに書いてみるのはどうかな？どんなにぐちゃぐちゃになってもいいから書いてみると、自分の気持ちを整理できるかもしれない。」

私は1冊のノートを買って帰り、その日以来思ったことを書き綴るようになった。

最初はなんて書いていいのかわからなくて、1文字も書けなかった。何日もそのノートに色が加えられることなく、しばらくすると書くのをあきらめたくなる。

そんなある日、お母さんが見ているテレビを横でぼーっと一緒に見ていた。テレビにはバンドの人たちが映っていて、失恋ソングを歌っていた。

僕の愛を伝えたら抱えきれないと逃げだした 僕の愛を隠したら心がないと去っていった
君のちょうどいいに気づけないと 僕の心地いいは築けないんだ

異性を好きになったことはない。でも、なんだかこの歌詞が心に刺さった。

人に自分の思っていることを伝えるのが苦手。どうやって伝えたらうまく伝わるのかもわからないし、相手の負担になってしまわないかと不安になる。でも、遠慮してしまっていたら何も伝わらない。

私はノートにその曲のフレーズを書いてみた。他人から聞いた言葉。それでも自分の琴線に触れたことには変わりなかった。それからいろいろな音楽を聴くことにして、その中で気に入った歌詞をノートに書くことにした。すると、自分の思いみたいなものも少しずつ表現する方法がわかったような気がして、人の作った歌詞と自分の思っていることの割合が少しずつ変わっていくようになった。

そんな中学時代を過ごし、高校生になった。同じ中学から進学する生徒はいなくて、誰も知らない環境で1から始めることになる。だから、少し頑張ってみることにした。中学では入っていなかった部活に入ると決めた。

入学して1週間。いろいろな部活を見に行ってみようと試みた。でも、持ち前の引っ込み思案なところが出て、部室の近くまで行って勇気が出なくて引き返したり、遠くからグラウンドの運動部を眺めたりするだけで、中に入っていくことができない。

途方に暮れそうになった時、掲示板に部員募集の張り紙を貼ろうとしている女子生徒とあった。これがドラムの中谷夢（なかに ゆめ）との出会いだ。

勇気をもって話しかけると、どうやら軽音部を新しく作ろうとしているらしい。ピアノなら弾けるし、キーボードならできるのかもしれない。もうここしかないと思った。

ここで声をかけられなかったらどの部活にも入れる気がなくて、とにかく必死だったからなんて話したのかはあまり覚えていない。でも、夢ちゃんは私を仲間として迎え入れてくれた。

案内された部室である第二音楽室には隣のクラスのベース担当の浜田清太（はまだ きよた）とギター＆ボーカル担当の原山海（はらやま うみ）がいて、それぞれ自己紹介をしてくれた。正直男子は少し怖いけど、二人とも男子の中でも比較的穏やかそうな人たちで、もし本当にそうなら大丈夫そうな気がした。

その後、同じクラスの山瀬浩樹（やませ ひろき）が入部した。正直彼が一番怖かった。

クラスの女子もイケメンと騒いでいたように顔が整ってて、自分からはあまり話さない。何なら女子と話しているところなんて見たことないくらい。

それでも彼の入部により、軽音部は正式な部活として認められることになった。

夢ちゃんは基本的にずっとドラムをたたいていて、初心者である山瀬くんには原山くんがギターを教える。私は残された浜田くんと話す機会が自然と多くなり、自分を出せるようになった。

「夢ちゃんはすごいね。あんなに上手なのに、毎日ずっと叩いててドラムにそれだけ真剣なんだって思うよね。プロになったりして。」

「うん。素直に尊敬するよ。同じ中学校だったけど、ドラムが引けるなんて知らなかったし、誰にも言わずにずっと練習してたんじゃないかな。」

「浜田くんも上手だよ。今までずっと練習してきた人の演奏だって分かるもん。演奏しているとき真面目な顔になるから、いつもと印象変わってかっこいいよね。」

「え。あ…。ありがとう。」

特に他意はなかったんだけど、男子にかっこいいなんて言ってしまったのは初めてで、もしかしたら不快な思いをさせてしまったんじゃないかと不安になる。

でも、浜田くんはその後も態度が変わることなく仲良くしてくれているので大丈夫だったのだろう。むしろ何気なく褒めたはずなのに、かっこいいという言葉のせいで、妙に浜田くんを意識し始めてしまった。

言霊なのかもしれない。ベースを弾いている姿を見るたびかっこいいなと思うようになってしまい、二人で話すときはドキドキして仕方がなくなった。

これが恋なのかな？そんな疑問を否定する要素なんて見つからなくて、素直に気持ちを認めることになった。とはいえ、もしかしたら浜田くんには彼女がいるのかもしれない。彼女はいなくても好きな人はいるのかもしれない。でも、恋愛なんてしたことのない私にできることなんて何もなくて、ただ毎日を過ごすことで精いっぱいだった。

そんなある日、部内での体制が変わることになった。山瀬くんが作曲ができるということが分かったらしい。どうやら昔から曲を書いていたらしくて、実際に聞かせてもらった曲もとてもかっこよかった。

どうせならオリジナル曲を作っていきたい。そんな話になった。

今までの私ならきっとこんな時に立候補なんてしなかったはず。でも、作詞をしてみたいとみんなに伝えた。いいものができるのかはわからないけど、みんなからも背中を押してもらえて頑張ろうと思った。

いっぱい悩んで、いろんな言葉を並べて、なんとか1曲書き上げた。少し怖いけど山瀬くんにも少し相談して完成させていった。

そうやって夏休みに入るところには何曲か出来上がっていて、学園祭にはオリジナル曲だけで演奏を披露できそうだった。

正直言うと少し怖い。自分の書いた歌詞を人に聞かれるのも、人前に立って演奏するのも、今まで前に立って何かをしたことない私からしたら怖くて仕方がない。でも、ここまで来たら逃げ出すわけにはいかなくなっていた。

部員のみんなのことは好きだったし、それに浜田くんをがっかりさせたくない。それが原動力。正直、気持ちはどんどん大きくなっていった。

この頃には軽い冗談も言い合えるようになっていて、からかわれることもあった。でも嫌な感じじゃなくて話を広げてくれるような感じで嫌な気はしなかった。こういう時どうしたらいいのかわからない。恋愛相談をしてみたいけど、私の話を聞いてくれそうな女子は夢ちゃんくらいしか思い当たらない。

好きな人ができた。そうすると夢ちゃんは話をちゃんと聞いてくれた。夢ちゃんは恋愛に興味がないらしく、好きな人はいないと言っていたけど、私の話を嫌な顔しないで聞いてくれる。

相手が誰かは話していないけど、相手のどこが好きなのかって聞かれたので、「たまに意地悪だけど、すごく優しいし、カッコいいんだよ。」と答えた。同じ中学校出身って言うたし、もしかしたら相手がばれてしまうのかもしれないと思ったけれど、夢ちゃんはそれ以上余計なことは聞いてこないでくれた。

そんなこんなで夏休みに入った。部活には毎日顔を出している。全員揃ったら合わせて演奏しよう。いないときは自主練しよう。そんな感じに軽く決まった夏休みの計画だけど、ほとんど毎日みんな部室に顔を出していた。

少し経った頃、部活が終わった後の帰り道。私は作詞ノート部室に忘れてきてしまったことを思い出した。みんなと分かれた後だったので一人で取りに帰ることになる。明日でもいいのかもしれないけど、今日の夜少しだけ作詞を進めたかった。

部室へ行くと何か落ちていることに気が付いた。私は気になって拾いに行くと、それはノートで、悪いなと思いつつも中身を見てみればたくさんのイラストが描かれていた。最初は何かわからなかったけど、どうやら男の人同士がいちゃいちゃしている絵がたくさん描かれている。

私は驚いてそれをその辺の机の中に押し込んだ。そして、隣の机の中に入っていた作詞ノートを取り出すと慌ててその場から逃げ出した。いったい何だったのかはわからないけど、もし間違いじゃないなら浜田くんと原山くん……。

もしかして浜田くんと原山君はそういう関係なのだろうか？そんな疑問を抱いたまま家に帰り、頭から離れてくれないせいでなかなか寝付けなかった。結局いつもよりも遅く寝たせいで少し寝坊気味に部室へと行くと、もう全員部員は集まっていて、昨日私が見つけたノートがばらばらに破かれた状態で落ちているのを呆然と眺めていた。

他キャラクターのイメージ

【原山海】

明るくて気さくでいい人だと思う。でも、浜田さんと本当にそういう関係なのかな？もしそうだったら申し訳ないから、私は余計なことはしないほうがいいのかも。ここに居場所がなくなったら他に行くところなんてない

【浜田清太】

優しくて穏やかな人。少し前から気になって好きになってしまった。たまに冗談で意地悪してくることもあるけど、基本的には優しくてカッコいいところもあると思う。特にベースを弾いている姿はカッコいいと思う。

【中谷夢】

さばさばしている。ドラムへの本気度が違い、いつもどんな時も練習をかかさずおこなっていて、とても上手。恋愛相談にも乗ってくれるけど、好きな人が誰かは恥ずかしくてまだ教えていない。

【山瀬浩樹】

同じクラスで、作詞と作曲をやっているので話すことはよくある。口数が多いほうじゃないけど、接してみた感じは悪い人ではないと思う。いい曲をたくさん書いてくれるので私も頑張らないと思う。

以前、ボトルシップに流した内容

【作詞をしながら書いた投稿の内容】

想いとか気持ちを言葉にするのって難しいな。でもすこしずつできるようになってきた気がする。

【部室に一人でいるときに浜田さんのことを思い出して書いた投稿の内容】

いつも優しくしてくれてありがとう。

たぶん、本人にこの投稿が見られることはないからここでこっそりお礼いってしまおう

【夢ちゃんと恋バナをした後の投稿の内容】

好きな人いるのかな？聞いてみたいけど、失恋するのはちょっと怖い。臆病だなあ。

目標

- ・BL本を書いた人と破いた犯人を探す。(誰がやったのかは気になる。)
- ・本の内容が本当かを探る。(もしも本当なら失恋することになる。)

ボトルシップのID
mftmrw

ひいてはいけないボトルシップの番号
5・9・21